

8 道具・器物・衣服

8—1 刃物

8—1—1 木を切る道具

エムシemus（刀）を短くして、ナタにした。ウパシ ペラ upas pera という雪かきを作る時にはこのナタで木を削って作った（釧路編 8—9、9—3—1 参照）。タシロ tasiro は、山刀で、ナタとは違って、先が尖っている。

[屈斜路 日川キヨ氏]

8—4 衣服・履物

8—4—6 履物

カンジキ

テシマ tesma（カンジキ）は、猟に行くとき、薪採りに行くとき、家の前の雪を踏み固める時に使う。いつもアサンド asanto（物置き）の壁に立てかけておく。

[屈斜路 日川キヨ氏]

魚皮製の靴

サケ皮の靴をチェブ ケリ cep kerī という。

秋味（サケ）の皮は、秋に生皮をはいでおく。秋味は、6～7本皮を剥いでとっておく。靴にする魚皮は薫製にしない。皮を一度塩につけると良いと母親に教えられた。1ヶ月以上も上に重石をして塩につけ込む。昔は塩がなかったので釧路から海水を運んで来て塩水を煮つめてからさまして、魚皮を突っ込んでおいたそうだ。

イトウなどの他の魚の皮を使ったのは聞いたことがない。自分は、他の魚の皮を実験してみたが皮が弱くて駄目だ。だから昔の人も使わなかったのではないか。秋味は、雄のサケの皮の方がよい（何故か理由は不詳）。

冬に魚皮はたたんで樽だか箱だかに入れてアサンド asanto（物置）にとっておく。夏は、アサンドに掛けて置く。使うときには、水にうるかすと広がって柔らかくなるので、オヒョウの樹皮の糸でサビタの木の針を使って縫う。サビタの木は、骨みたいに硬い。サビタの木を細く割ってつま楊子くらいの太さに切る。マキリの先で魚皮に穴を開け、印をつけてその穴に糸を通す。

サケ皮の靴は、長く持たない。一冬に2～3足履きつぶす。

男の人もハボ hapo（母）に、「こうしてつくった方が良いとか、こうしてくれ」と教えて、靴作りを手伝った。子供の時には、サケ皮の靴ばかりではなく、高丈や普通の靴もあった。だから、サケ皮の靴を履いていたのは、年寄りだけだった。

私は、子供の時にサケ皮のケリを作ったことはないが、屈斜路に来てから、母に教えてもらってサケ皮の靴を作った。脚の部分がかかなり高い靴を作ったこともある。

秋に枯れた草をとっておき、冬にサケ皮の靴を履いたときに、手でもんで柔らかくして靴底に敷くと暖かい。雪の下でも枯れた草があるので冬でもとれる。柔らかい草であればどの草でもよい。草の種類は決っていない。

ケリは、よその家に行った時、アサンドの中で靴を脱いで、雪を払って、足とすねの間で折畳み、家に入ったところに置いてから家に中に入る。徹別では、母親がサケ皮の靴を作っていた。ホシ hos（脚絆、カイグサの皮をよった糸で作る）は靴の中に入れて、脚の部分は左右に分かれているので、左右を合わせ紐でしばる。脚半を靴の上にかぶせて縛っても構わない。（魚のウロコの向きとか背鰭の向きはどうしたのか、との質問に対して、「向きは関係がない。滑り止めは、履いた後、オヒョウの樹皮製の紐を2本、前と後ろに靴底から靴の甲に巻いてしばりつけるので、その紐がすべりどめになる。」と答える）靴底は、ツルツルになっていた。

〔屈斜路 日川キヨ氏〕

樹皮製の靴

秋にオヒョウの皮の紐を編んで足袋みたいな形の靴を作る。縦糸を20本も使って編み上げていく。足袋よりもすねの部分が少し長い。これもケリ kerī である。夏にも冬にも履く。冬用は、目を詰めて暖かくなるようにするが、夏用は、目が少し粗くてもよい。

〔屈斜路 日川キヨ氏〕

8—4—7 脚半(hos)

ホシ hos（脚絆）は、カイグサの皮をよった糸で作った。

〔屈斜路 日川キヨ氏〕

8—5 機織と裁縫

8—5—1 機織と裁縫の道具

母親は、木の板に石を垂らした機織木（イテシ ニ itesi ni）でキナ kina（敷物のゴザ）を織っていたが、厚司などは織っていなかった。

〔屈斜路 日川キヨ氏〕

8—5—2 機織と裁縫の種類

イカラカラ ikarkar とは、樹皮から作った紐で編むことを言う。（ケメイキ kemeiki とする

ことばについての質問に、「知らない」という。）

[屈斜路 日川キヨ氏]

機織り (イテセ itese)

厚司 (attusi ではなく atusi と発音) をこしらえる人は徹別 (テシベツ) にはいなかった。母親は、機織木 (イテシ ニ itesi ni) を使ってシキナ sikina (ガマ) でキナ kina (敷物のゴザ) は織っていたが厚司などは織っていなかった。アトウシ atusi (厚司) を作るのは女だけで男は作らない。

[屈斜路 日川キヨ氏]

徹別で、大人になってからの事だが、秋にアイ ay (アウ awとも言う) というカイグサを採って、エカ éka (よる) をやって糸にして玉にしておく。カイグサは丈夫なのでよって (é ka éka) 糸にする。その糸を縦糸や横糸にして機織木でチョツキに織っていた。オンネチセ onne cise のフチ huci (名前は覚えていない) がチョツキ (エカエカイミ ekaekaymi 「よった糸で作った袖無し」) や脚半 (ホシ hos) を作った。チョツキは、前で合わせて紐でしばった。服の上から着るものだ。

[屈斜路 日川キヨ氏]

8—6 運搬・収納具

8—6—1 運搬具

サラリプ sararip (編み袋、小出し) はブドウ皮で作る。サラリプは、トゥレプ turep (オオウバユリ) 採り、プクサ pukusa (ギョウジャニンニク) 採りに行くときにに入れて持ち帰るのに使う。肩に紐をかけて背負う。また額に幅の広い部分をあてて御用カゴみたいに使う。

[屈斜路 日川キヨ氏]

8—8 楽器

ムックリの製作

竹の方が振動が強くて良い音が出るが、昔は、サビタの木でムックリを作った。自分の今持っているサビタのムックリは夫の善次郎さんが作ったものだ。

最初は、マキリでだいたいの形を作る。紐を付ける所は、端から人差指1本分の所に紐を通す穴をつける。その穴から指2本分で振動部 (パルンベ (舌) といふかとの間に、答えがはつきりしない) の始まる所で、そこから細くなる。そこから指4本分で振動する舌の部分の端になる。全体の厚みは、前に作った音の良いものと同じ厚みにする。

それからムックリを魚の油で煮た。今は、シラシメ油を使う。サビタでも竹でも油で煮ない

と音が鳴らない。

さらに音を鳴らして調節しながら削って行き、完成する。振動する舌の部分は、握る手元の部分をより薄く削る。今でも釧路にムックリを製作できる人が2人いる。

ムックリの演奏に使う紐はオヒョウの樹皮をよって紐にしたものだ。今は丈夫なので漁網を使う。

[屈斜路 日川キヨ氏]

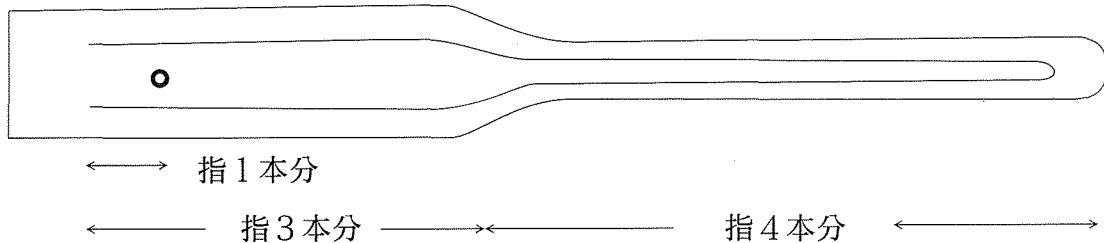


図5. ムックリの製作

8—9 その他の道具・器具

除雪具

木を削って除雪具を何本も作る。雪をかきだす部分は、柄の部分よりも幅が広く20 c mくらいある。長さは5尺くらいで人の背の高さくらいだ。ウパシペラ upas pera と言ったかも知れない。この櫓のような形の除雪具は、アサンドに置いてある。(釧路編2—1—7、8—1—1、9—3—1、9—4参照)

[屈斜路 日川キヨ氏]